ついに今日がやってきた。

茜色の着物を身に纏うモミジはそう思いながら、夕焼けに染まる空の下で約束の待ち合わせ場所を目指して歩いていた。

向かう先はベルガモットバレー王都東門から出て歩いて十分程度の場所にある神殿だ。

その名も〝コウリュウ神殿〟。この国が誇る伝統の建築様式で創られたそれは、ベルガモットバレー各地に点立している神殿群、通称『神社』の一つであり、この国では当たり前に存在する名物の一つだ。今日はそこでお祭りが開かれる日だ。

今のモミジは祭りにふさわしいよう、おめかしをしっかりとしている。親友たちから教えてもらったやり方の通り、ナチュラルメイクをして、勧められた香水を付けて、着物とリボンをしっかりと身に着けた。

そして右手首には恋愛成就のお守りである、紅と白の組紐を通している。

――うん、大丈夫。いつもの自分でいればいい。

トクン、トクンと沸き踊る胸を抑えつつ、最低限の舗装が施された小径を歩き続ける。

すると次第に、周囲のいろは楓の紅よりも紅い色をしている鳥居が見えてきた。神社の入口、その鳥居のそばに着物姿の男が立っている。紺色の生地を纏い背筋の整った茶髪の青年の口元は柔らかく、これからの時間を心待ちにしているのがひと目でわかった。

モミジはその姿を見つけるなり駆け寄る。

「おまたせしました」
声をかけると、男は柔和な表情とともに赤銅色の瞳をむけてきた。いつも執務室で見慣れた爽やかな笑顔だ。
「こんばんは、モミジ」
「団、長」
朗らかな声を聞いた途端に胸が熱くなる。対してモミジは彼を親しみ深い呼び名で呼んだ。
モミジはこの世界の平和を護る討ち手、花騎士だ。
そして彼は花騎士たちを率いて害虫へ立ち向かう、勇ましき団長である。
自分たちは公には上司と部下の関係だが、今は互いに一人の男と女として想い合う恋人同士だった。
「お待たせしてすみません。約束の時間には十分間に合うよう、早めに宿舎を出たのですが」
対して団長は手を横に振りながら謝り始めた。
「そんなこと全然ないって。俺の方こそついさっき来たばかり」
「……なんだかその返し文句、マンガみたいです」
「事実なんだから仕方ないって。メイゲツから聞いたときから楽しみにしてたんだ、今日のデート。昨日の夜なんてまともに眠れなかった」
「それじゃ、旅行前の子供ですね」

「俺は我慢弱く、落ち着きのない男だからな。リードできるように下見もしたかったから早く来てみた」

デートは男がリードするもの。そんな風潮は今でも存在する。いつ、どこの誰がこんな風潮をこの世界に広めたのかは知らない。そんなしきたりめいた旧い常識で彼を困らせたくはない。

「そこまで気を遣わなくても……！　私だって花騎士となってから戦ってばかりでしたから、こういう催し事に慣れてません」

「大丈夫だって。……それにしても、今の着物姿、似合ってるよ」

「な……っ⁉　も、もう！　さり気なくそういうこと真正面から言うのはやめてください！　おせじ、ですよね？」

「世辞なもんか！　……今のモミジ、本当に素敵だよ」

さらに気恥ずかしい言葉を正面から投げてきた。我慢できなくて両手で顔を覆ってしまう。

着物が似合うことだってきっとたまたまだ。団長の一番の花騎士となるため、走り込み、腕立て伏せ、得物である大剣の素振り、平日も休日もそれらで汗を流したから無駄な肉がつかず、スタイルがいいように見えるだけに違いない。

もちろん容姿を気に入ってくれるのはこの上なく嬉しいが、いざこうして目の前で喜ばれると返す言葉がない。嬉しすぎて。

「団長だって着物、似合っていますよ。……お店でそろえたんですか？」

苦し紛れだが、意趣返しとばかりに訊く。
自分の茜色の服とは対象的な、紺の着物と羽織っている黒の羽織は、ひと目で見て上質そうな生地でできていた。
団長は貴族で裕福な生まれだ。きっと名のあるメーカーの傑作なのだろう。
「ううん、お下がりだよ。実家の屋敷から召使いに送ってもらった。死んだ兄さんのなんだけど、めったに着てなかったって聞いたから……でもそう言ってもらえて良かった。モミジと並ぶのにかっこ悪いのは嫌だし、服に着られてちゃ兄さんに追いつけてないみたいだしね」
いつも執務室にいるときの彼はベルガモットバレー王家直属の団長らしく、国のイメージカラーである赤と白の礼服姿だ。彼の着物姿を見るのは初めてだが、見ていると不思議と落ち着く自然さがあった。きっと彼の有する持ち前の優しい印象と、この国で生まれた彼の血筋が、着物との親和性を形作っているのだろう。
「今日の観月祭、心から楽しみにしていました。二人でたくさん楽しんでいきましょう。……よろしくおねがいします」
「ああ、俺でいいなら。こちらこそよろしくね」
団長はモミジの手を優しく握り込む。紳士然としたその一連の流れは彼らしい実直な仕草だ。
彼から温かさを感じながら二人で本殿へ続く参拝路を歩き始める。すっかり屋台が並んだその往路には、自分たちと同じように観月祭を楽しもうとする王都からの人々で溢れかえってい

た。彼らの中を歩きながら、モミジは祭りに向かうきっかけとなった友人たちとの思い出を頭に巡らせた。

「いい加減モミジさんは団長殿としっかりデートに行くべきだと思うわ」

祭りの前日。いきなりメイゲツカエデから宿舎の談話室へ呼び出されたモミジは、部屋に入るなりそう真剣な表情で訴えられた。彼女の隣（となり）にはサボテンもいる。

ふたりともモミジと同期の花騎士（フラワーナイト）であり、これまで同じ団長の下でいくつもの戦場（いくさば）で背中を預けあった親友同士だ。いきなりの二体一（ビンチ）でモミジは何も言えずに固まってしまう。

「貴方（あなた）たち、交際を始めてもう三年よ？　なのにずーっと友達以上恋人未満からロクに進展しているようには見えないわ。一体今まで何をしてきたの？　答えなさい」

「うん。私も興味ある。モミジ、お休みの日とか、団長さんと一緒にちゃんと過ごせてる？」

「それは、えっと……というか待ってください！　いったい、二人ともどうしたんですか？私と団長になにか不安が？」

机を軽く叩きながらそうまくし立てるメイゲツカエデと、首をわずかにかしげるサボテンに問いただされる。

二人になにか悪いことでもしてしまったのだろうか？　モミジは言うべき言葉を必死に頭の中で探っていると、メイゲツカエデが「ごめんなさい」と短く謝ったあとで切り出してきた。